

ゼミ論集に寄せて

経済学部教授

黒澤隆文

本論集は、京都大学経済学部黒澤ゼミ第7期生（2010年度の参加者。入ゼミ年度を問わない）の学習・研究成果の一部であり、①卒業論文、②個別レポート、③共同での研究・学習成果（ディベート大会参加記録）を収録しています。

黒澤ゼミでは、ここ数年、ヨーロッパの経済社会に関する学習・研究を中心的な主題として基礎文献の輪読を行いつつ、参加者は「社会科学的な手法に基づく研究」という非常に広い自由度の下で各自主題を設定し、個別報告を行ってきました。ゼミ募集時には「卒論・ゼミ論の執筆を強く推奨する」としています。一昨年までは種々の事情で論集の刊行には至っていませんでしたが、昨年、創刊号の刊行に漕ぎ着け、今年、第二号となる論集を刊行することができました。各人の主体的な学習の成果をこのように纏め、ゼミ論集として公表できることを、担当教員として大変嬉しく思います。

2010（平成20）年度の黒澤ゼミでは、前期のゼミではハルトムート・ケルブレ著（永岑三千輝監訳）『ヨーロッパ社会史 1945年から現在まで』の輪読を、また後期においては、本論集にも収録されているディベート大会への参加を柱とし、これに各人の個別報告を組み合わせる形で学習をおこないました。前期には、社会史的背景に関する視覚教材として、NHK『映像の世紀』第1集～第4集も用いています。他方、個別報告はこれらの合間に組み入れる形となりました。報告に関しては、アカデミック・ライティング教育の体系性の改善という、創刊号「巻頭言」で昨年記した課題を来年へと積み残してしまったように思われます。また、個別報告テーマと全体テーマの関連性の弱さといった課題も、担当教員としては反省材料として残りました。

とはいえ、自分の問題関心を問い直して主題を設定し、論証の材料と論理について苦闘し、さらに研究報告・討論を通じて新たな発見を得るというプロセスで学んだことも、少なくなかろうと思います。電子化と社会的コミュニケーションの形態変化の中で、暫時性の強い情報発信・情報保存の傾向ますます強まっていますが、紙媒体に残す形で作品を纏めたという経験や達成感が、今後の人生で少しでも糧になるとすれば、ゼミと本論集の目的は達せられたということになるでしょう。

本論集には、個人の作品としては、卒業年次にあたる喜多泰弘（4回生）の卒業論文と、2回生演習参加者の4編のゼミ個別報告が収録されています。喜多さんの卒業論文は、前年のゼミ論集にも掲載された製缶業に関する研究を深めたものです。独自に見出した新聞資料なども盛りこみ、かつ産業論の対象としては体系的に分析されてこなかった産業を多角的に考察した作品であり、水準の高い産業史といえましょう。

本論集には掲載していませんが、上述の個別の研究発表では、後藤弘さん（4回生）、朝倉健さん（4回生、後期出席）、中越雅也さん（3回生）も、各自のテーマに即してゼミで

報告を行っています。いずれも個性溢れる報告で、今後の発展が期待されます。

黒澤ゼミは、2回生演習も合同で実施しており、2回生もそれぞれ主体的にテーマを設定し、報告を行いました。本論集には、チアンラディントアーポーン・ドゥアンラットさん（ゼミでは愛称のノイナさんの名で呼ばれていました）、橋本優さん、文野聡也さん、山脇雄太さんの4名が、個別研究レポートの成果を寄稿してくれました。

第三部に概要が掲載されているディベート大会は、関西学院大学の藤井和夫先生のお誘いを契機に、2008年度（平成20年度）に第1回を行ったもので、今年は3回目となります。関学・神戸（今年度欠場）・関西大といった他大学のゼミナールとの対抗戦・交流は、刺激に富むプロジェクトであったようで、皆驚くべき組織力と主体性、集中力をもって準備を進め、しかもその過程を楽しんでいました。ディベートは論理力と表現力を鍛える場でもあります。経済学に関連した重要な主題を論題にとりあげたことで、主体的に政策学の学習を行う場にもなったように思われます。今後もこの企画を続けてゆければと考えています。

最後となりましたが、本論集の面倒な編集作業を引き受けてくれた中越さんと橋本さん、またそれをサポートしてくれた有尾さんに、心から御礼を申し上げます。

【付記】本論文集は、2010年度京都大学経済学部学生学習研究支援経費により刊行されました。